

広川町まち歩き「歴史・旅ノート」

濱本 哲

＝広川町まち歩き「歴史・旅ノート」とした事に一言＝

いなむらまち歩きの会が、2023年6月から12月まで著書『有田地方と広川町のむかし』をもとに、外江素雄先生をお招きして、広川町の縄文時代から江戸時代を「講義」していただくと同時に「まち歩き」を行った。

この講座を進めるにあたって、この本が1982年12月(第1刷)1983年2月(第2刷)で3000部(外江談)発行したのにも関わらず、先生の元にも、いなむらの杜図書室にもない事が判明(後に先生の教え子の協力もあり数冊が発見された)し、復刻しようとなった。復刻にあたってはプロジェクトを結成し、広川町地域おこし協力隊の宇田遥(うだ・はるか)さんに協力をお願いし、6月、委員10名弱でスタートした。このプロジェクトが宇田遥さんの絶大なる力で「広川町の消えゆく物語を残したい」を旗印に、25回(月2回)を迎え、ここに『源流』として発刊するに至った。『有田地方と広川町のむかし』の復刻は財政上の都合で出来ていないが、この本の副読本としてこの『源流』が再販プロジェクトとして発刊できたことは、町の発展と町民の健康に貢献する「礎」を宇田遥さんが作ってくれたと思う。

今後、ここ『源流』に広く広川町の市井の人が投稿し、消えゆく物語が多く書き留められることで、更なる歴史が積み重ねられ、源流が版を重ね、「広川町の史記」が出来れば、町民の広川町に対する愛着が生まれ、町の発展が模索され、高齢者の健康が保たれ「住んで良かった広川町、天寿を全うする広川町」になれると思う。

私の宿題は、広川町のすべての人が関係する、「教育」と「医療」の歴史を調べ、広川町まち歩き「歴史・旅ノート」として、書き留めていきたい。ただ、広川町の昔の農民や漁民がどのような生活をし、どのような教育を受けて、病気になった時、どのような医療を受けていたのか、資料は少ないので皆さんの知恵をお借りしたい。

また、そのことにどのような意義があるのか見えないが、広川町の昔の話を聞き、広川町を歩き、『広川町まち歩き「歴史・旅ノート」』として回を重ねていく中で、何かが見えてくると思う。

ひろの空を旅する

ひろ この響き

ひろ ひろ ひろ どこまでも青空に向かう

胸が膨らみ 破裂し 昔に向かう

白馬連峰を源流 流れる広川

神社 お寺に守られ

白河上皇と ご対面

長い 長い 道のり 歩いたり 走ったり

広湾に流れ込み ひと休憩

西の空に夕陽が傾き 海面に黄金色のベルト
その上を カモメが遊ぶ
補陀落浄土を目指して 渡海船が 西へ
極楽浄土につなみで消えた 人々集まり
阿弥陀如来が現れ やがて消えて 三日月
防波堤には二つの影が 一つになり
遠い昔を思い出す
お元気ですか

広川町まち歩き歴史・旅ノート

広川町の教育の歴史－1

広川町の庶民教育の歴史・寺子屋と私塾

濱本 哲

(はじめに)

2024年6月8日、耐久生涯大学は「広小学校新校舎の見学」を広川町池田尚弘教育長の案内で行った。プール、各教室、フロアーと説明を受けながら最後に屋上に上がった。

屋上から広の町を見下ろし、残念ながら、前の海は堤防の松の木に遮られ見えな
いが、背後の山は「広城」(高城)である。この地方を収めた広大な山城である。今は
山城の面影も無いが、山から吹いてくる風が、広小学校を守っているのではないかと
思わせる優しい風であった。この風に暫く吹かれながら、旧校舎を眺め、広小学校を
初め、南広小学校、津木小学校が開校されるまでは庶民の教育はどうなっていたの
だろうかと思った。縁遠い場所に置かれていたのだろうか。

いやいや、偉大な濱口御陵を生み出した所の地域である。昔から、教育・文化水準
は高かったのではないか。武家や一部の高尚な人だけではなく、一般的な庶民の教
育も行き届いていたのではないか。と考えた。しかし、8年前の2016年12月に広川町
に引っ越してきた私にはその疑問は「はてな？」であった。

たまたま、いなむらまち歩きの会のプロジェクトに発表の機会があり、「明治前後の
庶民教育はどうなっていたのだろうか」の疑問を解決の為に『広川町誌』などをひも解
いた。

1. 明治以前

わが国の学問や芸術は、それぞれの時代の権力者や貴族、僧侶の物であり、下
級菅史や庶民には縁の無いものであった。

わが地区広の昔の学問や教育のことについては、具体的なことは不明である。た
だ『広川町誌』に記載しているように、僧侶や神官、医師や武士、土豪などの身分の
人々は、ひと通りの学問技芸は修業したであろう。また、これらの人々について伝授
を受けた者もいたであろう。いかに草深い田舎であっても多少の文字が分かる者が
いて子弟にそれを伝え、それは学問とまでいかななくても、指導的な地位にある人は一
応の読み書きのできることは必要であった。

江戸幕府の文教方針は、一般百姓庶民が学問などして「目を開く」ことは為政者側
にとって好ましくなく、理屈や文句なしに、ただ黙々と働き、年貢さえ滞りなく納めて、
支配階級である武家階級の生活を支えていくことのみ要求されたのである。「民とし

て知らしむべからず、依らしむべし」であった。

ところが封建制度の下でも、社会生活が発展していくに伴って、庶民の間にも、せめて読んだり書いたり計算したりすることぐらいは身につけておかねばとの要求が起こってきた。つまり、生活をするうえで「読み・書き・そろばん」が必要になってきたのである。「字」の読めぬ者は「あきめくら」さえ言われるようになってきた。この庶民の要求によって、自然発生的とも言ってよい教育機関が即ち「寺子屋」であった。

「寺子屋」の名称は、寺院で僧侶が文字を教えたのが始まりから生まれたとされている。

「寺子屋」は、あくまで初歩の読み書き計算を教える初等教育で実用本位のものであった。寺子屋教育が普及したのは江戸中期以降からと言われている。寺子屋は「制度」でないから、当局から特別な保護や監督があるわけでもなし、教科内容や時間数なども自由であり、就学区域も定まっていない。

師匠(おししょうさん、おしょうはん)が、僧侶、武士、浪人、医師、神宮などの人々の中から、世間から依頼を受け、生活の資を得る為に開いた。

「寺子屋」には親が子を連れて寺入り(入学)し、年齢もまちまちであったが、8歳ぐらいから頼みに来た。授業は第一手習い(習字)、素読、そろばんでありその反復練習であった。授業時間は午前午後それぞれ二～三時間で午前中に終われば「ヒル上り」午後まで及べば「ヤツ上り」といった。

一方、女子は読み書きそろばんよりも、裁縫が大切な技術で、母や祖母からほどきされ、その後これを教えるお針(裁縫)上手な夫人宅に通って習得した。この家の事を「ぬいや」と呼んでいた。この「ぬいや」は若い娘が大勢集まって、にぎやかに世間話や若衆のうわさなどをしながら面白く楽しく縫うたと言う。この「ぬいや」は明治に入って学校教育を受けるようになってからもずっと継続している。

明治15年生まれの大阪の私のおばあちゃんも大阪天下茶屋で「ぬいや」(記憶ではお針子さんのおしょうさんとこと呼ばれていた)を開いていて、若い娘さんが何人か通っていた。「おしょうはん」の孫ということで銭湯に連れていかれたことをおぼろげに覚えている。

2. 寺子屋と私塾

明治16(1883)年文部省編の『史資料』は江戸時代から明治五年の学制領布までに和歌山県で一時でも存在した寺子屋は二九四校で私塾は三校(『和歌山県誌』では六校)であるが、両校の区分は必ずしも明確でない。

所在地別の寺子屋数は、有田群は九で、余りにも少ない。そこで、明治以降に編まれた自治体史記録を加えて寺子屋数は、有田群六七となったが、この数は調査も不十分で私塾との判別しがたいものもありまだ完全ではない。

寺子屋と大いに関係のある仏教がわが町広川に何時頃から入ってきたのかははっきりしないが、806年頃、僧空海が入唐招来した真言密教が有田郡部に普及した頃から、古寺の多くは真言宗であり、後になって、それ以外の他の宗教に属した寺院も、もとは真言宗であったというのが多い。伝承ではあるが津木岩淵の「観音寺」は、町内では最も古い時代に建てられた真言寺院だったと言われている。また、地理的にも広川の奥地は高野山領でもあったことが関係したのだろう。

広川地区は、各村(大字)の各寺院ではたいていの寺子屋を開いて、村童の面倒をみたことは敬老の話などではほぼ事実であったろうが、残念なことにその年代や師

匠さん、その規模など一切不明である。

ここでは『広川町史』などを元に寺子屋・私塾を営んでいたお寺・神社を列挙する。

万福寺(西山浄土宗)－広川町前田

昔から寺子屋を営み村童に教え、明治になってからも不明である前田小学校として利用され、津木小学校前田分校の前身である。

観音寺(西山浄土宗)－広川町下津木岩淵中村

徳川末期から明治の初めにかけて寺子屋も開き、「お茶講」という講もあった。津木小学校岩淵分校の前身である

広源寺(西山浄土宗)－寺仙

寺子屋を営み、村童を集め読み書きなどを教授していた。下津木小学校の前身である。

安楽寺(西山浄土宗)－中村

寺子屋を営み、村童を集め読み書きなどを教授していた。上津木小学校の前身である。

法昌寺(西山浄土宗)－西広

お堂で寺子屋を営み、西広小学校、学区は西広、唐尾の両村である。

霊泉寺(真言宗)－井関

お堂で寺子屋を営み、井関小学校、学区は井関、河瀬の両村である。

法蔵寺(西山浄土宗)－上中野

南広小学校の前身である中野尋常小学校は子のお寺を借りて開校した。本堂からよく見える堂で勉強していたと住職の話。

小学校の前身のお寺での寺子屋は資料が少しあるが、それ以外にもわが広川地域は、当時の各村(今の大字)の各寺院では寺院の僧侶が寺子屋を開いて村童の面倒を見ていた寺子屋はあるが、現在のところ全体は不明である。

お寺以外の寺子屋は、少ない資料から、井関の素封家である衣川家で、学問のあるお年寄りがいて自宅の長屋で寺子を開いていた。また、同じ井関で、西島重兵衛という落ち武者の子孫だと言われた人も寺子屋を営んでいたが時期ははっきりしない。津木村では明治初年から十五、六年ごろまで細谷養安というお医者さんがいて、医療のかたわら寺子屋を開いて子弟の教育もされた。「ぬいや」では広の中町に「ごた」のおしょうはんがいた。

広地域は昔から文化人も多く、早くから文化的に開けた土地柄であり、「寺子屋」以外に学塾があった。

「居幻舎」

分かっている範囲で一番古い学塾である。『安楽寺の歴史』によると安楽寺9代住職玉龍(ぎょくりゅう)の時代、1707(宝永4)年の大地震で西の浜の安楽寺が流失してしまう。その後、門徒の方々の協力を得て、1739(元文4)年本堂を再建した。1787年天明7年玉龍・映宋が若き学僧に教化していくために本堂の脇に屋敷をたてる。古文書の中に42名の名簿が残っている。第11代住職堅亮(けんりょう)はこの塾を「居幻舎」と名付けている。これが後に広村に創立された「耐久社」の前身となっていく。

「佐々木塾」

広八幡宮の佐々木家は代々学問好きの人が多く、早くから村童に手習い読書を授け、また好学者に対して漢籍や易なども教えていた。佐々木馬之助(五十鈴)が「家塾」を、慶応二年から、田町渋谷氏本家で明治七年まで開いていた。

寺子屋の資料は『和歌山県誌』『本県における寺子屋教育の調査』『南紀徳川史』『昭和一六年和歌山県教育史』など和歌山県全体の資料はあるがそこに広川町の資料は見当たらなかった。広川町の寺子屋・私塾の実態については、今後、個別のお寺や神社の古文書からその当時の状況を把握しなければならない。

文部省が1871年明治4年7月に設置されると、直ちに全国民を対象とする創設する準備に着手した。学区制などの制度の大綱はフランスを模範に、教育内容の上ではアメリカ合衆国の影響が見られるなど諸外国の教育制度を参考に作成され、1872(明治5)年に発布された。我が国最初の近代学校制度に関する法令である。8月2日に「大政管布告第214号」とともに「学制」が公布され、3日全国に領布された。それを受け、広川町に三小学校が設置される。

広川町まち歩き歴史・旅ノート

広川町の教育の歴史—2

広川町庶民教育・広川町三小学校とお寺

広川町三小学校の沿革は、明治・大正・昭和・平成・令和と150年の歴史であり、まさに広川町の歴史そのものである。1872(明治5)年8月「学制」の公布義務教育となったが実態はどうだったにか。広川町「広小学校」・「南広小学校」「津木小学校」の歴史をひも解く

1. 広川町広小学校

1959年(昭和34年)からの64年もの間、広の子供たちの学びの場であった旧校舎に別れを告げ、2024年4月から94名の生徒が新校舎で学ぶ。

主な歴史をたどれば、1872(明治5)年8月、「学制」の公布を受け、1873年(明治6年)5月、湯浅に公立湯浅小学校が中町の「福蔵寺」に開設された。これは湯浅組25カ村唯一の小学校であり、広もその通学区域になっていたため、湯浅まで通学した。1877年(明治10年)元有田郡民生局跡新校舎を建設(東校舎)、「福蔵寺」(西校舎)となる。

何故、「湯浅小学校」が「福蔵寺」に開設されたかは定かでないが、近世の「福蔵寺」は湯浅地域に於ける浄土真宗の有力寺院であり、中世末期には西国でも六十四箇寺があったという伝承が『福蔵寺諸記』に記されている。また、明治45年の『由緒書 龍頭山福蔵寺』には日高郡に二十ヶ寺、有田群に十六ヶ寺があったと記されている。これだけの数の末寺数を抱える大きな寺だった。

広も1875年(明治8年)11月23日に、小学校を創設することになり、仮校舎として「正覚寺」の堂宇(どうう)を使用することとなる。実際の授業開始は1876年(明治9年)3月14日となり、広・山田・名取・和田を修学区域として始まった。学校名は「広陵小学校」(開織小学校ともいった)となり、湯浅まで通学することは無くなった。児童は男七十五人、女二十六人で浜口大英、佐々木丑之助が教師を務めた。

「正覚寺」の広陵小学校は、1888年(明治11年)「広小学校」として、生徒数も百二十八人(1878年(明治11年)3月、男九十四人、に対して女三十四人と、女子の低さが現れている)に増え、校舎を新築した。

広川町立広小学校の沿革

1872(明治5)年8月、「学制」の公布

1876年(明治9年)3月 正覚寺の堂宇で開設し、授業開始

1878年(明治11年) 生徒数の増加により、貢祖米倉跡にて校舎新築

1887年(明治20年) 3月	広尋常小学校となる
1899年(明治32年)	養源寺前に新築
1906年(明治39年) 1月	養源寺境内の一部を運動場として借入
1926年(大正15年)11月	広村尋常高等小学校認可 生徒数の増加により現在の場所に校舎を移転
1947年(昭和22年)	廣村立国民学校改称
1955年(昭和30年)	広小学校と改称
1959年(昭和34年)3月	新校舎完成(現校舎)
1975年(昭和50年)	創立100周年
1989年(平成元年)	校舎改修工事完成
2009年(平成5年)	創立130周年
2024年(令和6年)4月	新校舎で授業開始

正覚寺(しょうかくじ)

山号(さんごう)

白雲山

* 山号とは、仏教の寺院に付ける称号。寺院によっては付けてない所もあり、付けている場合も、その寺院が所在する山の名を付けている場合と、関係のない仏教用語を山号として付けている場合がある。

宗派

浄土真宗本願寺派(じょうどしんしゅうほんがじは)

本尊

阿弥陀如来(あみだによらい)

在地

広川町広1361

沿革

1524年(大永4年)僧教意が実如上人より、方便法身画像を下附され道場を建てたのに創る。場所は天王の地に在ったが天正年間に火災で焼失し、寛永3年再建、同18年現在地に移った。開祖から凡そ170年、数代たつて後に、元禄6年10月、本願寺第四世寂如上人より本尊、寺号をうけて正覚寺と公称した。その後、宝永四年・安政元年の津波で大破し、現在の本堂は、文久四年修復再建したものである。現在、かなり劣化して改修する必要もある。浄土真宗本願寺派の古いお寺である

2. 広川町立南広小学校

1876年(明治9年)7月21日に校区は殿、上中野、南金屋、東中、柳瀬の各村で「殿小学校」が創立され、8月には「法昌寺」のお堂で「西広小学校」が西広、唐尾の両村を校区して創立した。1877年(明治10年)4月に「霊泉寺」のお堂を借りて、校区は井関、河瀬の村で「井関小学校」が創設される。

広川町立南広小学校の沿革

=1872(明治5)年8月、「学制」の公布=

1876(明治9)年

7月、殿小学校が開校、学区は殿、上中野、南金谷、東中、柳瀬。

8月、法昌寺のお堂を借りて、南広小学校が開校、学区は西広、唐尾。

1877(明治10)年

4月、靈泉寺のお堂を借りて、井関小学校が開校、学区は井関、河瀬。

1878(明治11)年

3月、西広小学校は、西広小学校、唐尾小学校の両校に分離。

1881(明治13)年7月、上中野小学校は、殿小学校より分離。学区は上中野のみ。

1885(明治18)年8月、山本小学校が開校、(殿、上中野、西広、唐尾小学校は廃止)

学区は唐尾、西広、山本、上中野、南金谷。

柳瀬、東中、殿は井関小学校の学区。

=1903(明治20)年4月、小学校令改正=

1903(明治20)年4月、山本尋常小学校、井関尋常小学校と名称変更。

1912(明治45)年4月、高等科併設 校名を南広尋常高等小学校。

1941(昭和16年)年、4月、校名を南広国民学校。

1947(昭和22年)年 4月、義務教育が9か年となり、校名を南広小学校。

1955(昭和30年)年4月、町村合併により広川町立南広小学校。

1960(昭和35年)年 5月、新校舎落成。

1976(昭和51年)年10月、創立100周年記念式典

法昌寺(ほうしょうじ)

山号

潮音山(ちょうおんざん)

宗派

西山浄土宗(せいざんじょうどしゅう)

本尊

阿弥陀如来(あみだによらい)

在地

広川町西広628

沿革

詳細は不明である。もとは寺谷にあった真言宗の寺院がここに移ってきた。徳川時代末期まで、この地から西国や五島通いをした人大勢いて、その人からの寄附になる半鐘が残っている。また、手眼寺観音の縁起巻物一巻が保管されている。

この寺の隣地が、最初の西広小学校の地で、今そこに西広地区の公民館がある。

靈泉寺(れいせんじ)

山号

白井山宝巖院(しらいざんほうげんいん)

宗派

真言宗(しんごんしゅう)

本尊

観世音菩薩

在地

広川町井関稻荷山

沿革

井関の稲荷神社とその成立の起源を同じくし、稲荷社僧を兼ねていた。明治になって行われた神仏分離令により、今まで稲荷社と境内を同じくし、その社僧でもあった霊泉寺は廃されてしまった。本地観世音菩薩は堂と共に、井関圓光寺内に移された。

3. 広川町津木小学校

明治初年、寺子屋式教育に端を発した津木小学校は、明治、大正、昭和と「創立100周年記念式典」をひも解くと、日本の国の政策に翻弄された津木小学校の姿が浮かび上がる。

旧津木地区は、先の「寺子屋」の所で述べたが、古来、地域的な特異点があり、隠れた知識人ともいべき武士や僧侶の隠棲していたのではないかと推測される。これらの人により、学問の初歩を教えられた。

前田地区では「万福寺」、寺仙では「広源寺」、中村は「安楽寺」、岩淵は「観音寺」の寺子屋で読み書きなどを教えていた。

1872年(明治5年)の「学制」発布後でも、依然として寺子屋の継続はあった。明治9年8月3日、「安楽寺」(上津木)の本堂で林昇龍が先生になり、落合、中村、猪谷を就学区域として、上津木小学校を開くが、児童の就学はかんばしくなく、同じく、9月4日に下津木小学校を開校するも、前田と岩淵はまだ寺子屋であった。

広川町津木小学校の沿革

前田地区「万福寺」寺仙地区「広源寺」中村地区「安楽寺」岩淵地区「観音寺」の各寺院は寺子屋を営み村童を集め読み書きなどを教授し、明治になってからも各小学校として利用される。

上津木小学校

1876(明治9)年8月3日

安楽寺本堂を仮用して開校、学区は中村、猪谷、落合

1887(明治20)年2月

安楽寺本堂を取り除き校舎新築

1889(明治22)年

上津木簡易小学校と改称。児童就学率振るわず

1899(明治32)年

女子の卒業生1名

1908(明治41)4月

小学校令改正、修業年限6カ年

下津木小学校

1876(明治9)年8月4日
元のお蔵を仮用して開校
1882(明治15)年・1885(明治18)年
校舎増築
1891(明治20)年
前田校と合併し、下津木尋常小学校と改称
1903(明治36)年
岩淵校を分教場として合併
1908(明治41)年
4月、小学校令改正、修業年限6カ年にともない、両校合併し 津
木尋常小学校となる。本校を落合におき、下津木校と岩淵校
を分校にして発足
10月20日、上津木尋常小学校、下津木尋常小学校の合併
1914(明治3)年4月 津木尋常高等小学校
1941(明治16)年4月 津木村立津木国民学校
1947(昭和22)年4月 津木村立津木小学校
1955(昭和30)年4月 広町、南広村、津木村の合併。広川町誕生
広川町津木小学校
1976(昭和51)年 10月20日
創立100周年記念式典

万福寺(まんぷくじ)

山号

瑠璃山(るりざん)

宗派

西山浄土宗(せいざんじょうどしゅう)

本尊

阿弥陀如来(あみだによらい)

在地

広川町前田528

沿革

1771年～1789年(天明年間)頃に創立された。薬師如来法量をお祭りしていたので瑠璃山といい堂の向きは西向きになっている。薬師瑠璃光如来は東におわす故に、寺の本尊は阿弥陀如来である。他に靈巖寺から伝来した不動明王がある。また、逗子入りの阿弥陀、観音の小像もある。本堂は1962(昭和37)年に新築された。

この寺は昔から寺子屋を営み村童に教え、明治になってからも前田小学校として利用され、津木小学校前田分校の前身である。

広源寺(こうげんじ)

山号

楽邦山(らくほうざん)

宗派

西山浄土宗(せいざんじょうどしゅう)

本尊

阿弥陀如来(あみだによらい)

在地

広川町下津木962

沿革

1892(明応2)年、玄幽上人の開基で、元は権蔵原の山上にあった。1754(宝暦4)年正月火災にかかり、古文書、宝物など焼失した。今あるものは椎崎右エ門が寄贈した十一面観音立像と、本尊としていた石仏を灰の中より収めて現在の所に移した。1863(文久3)年に堂宇を再建して現在に至っている。寺伝では本堂東側の庭園に、開基の墓、宝篋印塔(ほうきょういんとう)がある。型は小さいが室町期のものとすいていされる美しいたうであるが、無銘である。また、平家の落人たちが三十数名この里に隠れ、二軒にわかれ住んでいた家を、寄せてこの堂を建てたといわれている。

安楽寺

山号

不明

宗派

西山浄土宗(せいざんじょうどしゅう)

本尊

阿弥陀如来(あみだによらい)

在地

広川町上津木中村

沿革

老賀八幡社の社僧であり、宗旨も真言宗であったらしいが、詳しくは不明で、寺も今はなし。法蔵寺の末寺になって浄土宗になり、広源寺に合併された。この寺の資料としては何もなく、老賀八幡社神主の書いた記録のみである。

観音寺(かんのんじ)

山号

北斗山(ほくとっざん)

宗派

西山浄土宗(せいざんじょうどしゅう)

本尊

阿弥陀如来(あみだによらい)

在地

広川町下津木岩淵2088

沿革

口碑伝承によるとずいぶん昔からあったようであるが、たしかな記録も遺物もないので不明である。伝承ではあるが津木岩淵の「観音寺」は、町内では最も古い時代に建てられた真言寺院だったと言われている。また、地理的にも広川の奥地は高野山領でもあったことが関係したのだろう。

妙見社の旧記の記載によると、初め妙見寺といい後に観音寺と改め、南朝ゆかりの寺として存在し、役行者の開基で、1387(嘉慶元)年2月1日に焼失したとある。現在の堂は1935(昭和10年)8月に新築した。

岩淵地区は相当早くから開けていて、住吉の高野街道、十津川や日高への間道筋

になっていた。

現在は無住であるが、昭和の初期までは住職がおり、徳川末期から明治の初めにかけて寺子屋も開き、「お茶講」という講もあった。

* お茶講(おちゃこう)ー近隣の者が集まって情報交換・親睦を深める集まり

終わりに

広川町の人々の教育を辿ってきたが、寺と「寺子屋」「小学校」の関係を地域に入りさらに掘り下げて調べなくてはならない。学制配布で小学校が義務教育になったが修学状況はどうだったのか、特に女子の修学状況は男子より低いのはなぜか、調べなくてはならない。卒業生から学校の状況はどうだったのかも聞き出し、複合的に広川町の初等教育の歴史を今後の課題である。

参考文献

『和歌山県教育史資料研究 第一集寺子屋』和歌山大学教育研究所

『和歌山県誌』

『広川町誌』

『湯浅町誌』

『みなみひろ開校表百年史』

『広小学校百年史』

『津木小学校百年史』

広川町まち歩き歴史・旅ノート

広川町の医療の歴史ー1

広川町での西洋医療の始まり、「なぎ私立病院」の設立

(はじめに)

2024年6月28日、ふれあいカフェ主催のミニ学習に「横矢クリニック」の横矢悠太先生に「地域で生きる」と題して講演をして頂いた。講演後、広川町の地域医療の話から、昔話になり、広川町には、「広川診療所」「塩路診療所」、津木にも診療所があった。そこらは、親父(横山行弘・有田石会長)が詳しいのではないかと話されていた。また、親父は介護と医療の関係も熱心にしていて話されていた。

その話を聞きながら、今、人口6500人強の広川町には診療所は「横矢クリニック」一ヶ所であるが、近代医療を後押しした濱口悟陵を生んだ土地である。広川町がたどってきた医療の歴史を知りたいと思い、図書館に通い、『有田郡誌』『広川町誌』『湯浅町誌』などを中心に模索したが、広川町の「医療の歴史」は不明な点が多くあったが、1881(明治14)年の「なぎ病院」が広川町での西洋医療の始まりである事は判明した。

1. なぎ病院開設まで

江戸時代の広川町の医療については、具体的な資料はないが、多くの医療の歴史の本や『広川町誌』から推測すると、粗食で働きづめの農村の人達や山村の人々の健康状態は、決して良好ではなく、身長も低く、体重も割合に少なく、平均寿命も50歳前後が多かった。このような状況では、伝染病対策も進まず、天災でもくれば最悪の状況だった。多くの人々は、病床につくと御祈祷や売薬を服用する程度であった。医師の診察が受けられるには、村の頭百姓の重病人の範囲であった。しかし、この

人たちの診療記録は無く、どの様な医療を受けていたのかは不明である。

その上に、江戸時代の百姓に対する政策は、「生かさず殺さず」「百姓と胡麻の油は、絞れば絞るほど出てくるものなり」と言われたように、農民は過酷な税にも押しつぶされていった。

我が国における医療の受け方は、病人は家族の介護を受けながら自宅で療養するというものであった。つまり医療の基本形態は往診による自宅療養であった。やがて、時代が明治になると近代国家を目指し様々な改革を推し進め、医療においては、「太政管」で1868(明治元年)年、西洋医術の採用を布告し、1870(明治3)年ドイツ医学の採用を決定した。この結果、わが国の医療制度は・衛生行政・医療教育・医師の身分制度は、急速に近代化し、西洋化することとなった。そのことにより、医療形態は病院による治療を主体とする方向に進み、在宅による療養は衰退した。

病院の登場はわが国における医療近代化の重要な舞台となり、高度の医療を行う場所として、入院患者の収容・治療する施設として全国に設置されるようになった。1877(明治10)年には、殆どの府県に公立病院が建設され、和歌山県においては1875(明治8)年に和歌山県医学校兼小病院が和歌山県病院と改称された。

しかしながら、実際にそこでの診療の恩恵を受ける者は一部の人々に限られた、また、地域の開業医であれ、治療をうけられる庶民は限られていた。特に地方に居住する住民は西洋医学の受ける機会も少なく、施設にも恵まれなかった。そのことは濱口悟陵の故郷広村でも同じであった。その様な中、江戸で優秀な西洋医学者と交わりの深かった濱口悟陵は故郷有田の住民達の病に苦しむ人々を見て彼らを救うことが急務と考え、病院の設立を訴えられた。

2. なぎ病院の開設

1981(明治14)年、濱口悟陵62歳の時に、郷土有田の住民の衛生状態が大変悪い事を憂い「私立病院設立願い」を和歌山県に提出する。この提出された「設立願」が吉村英徹の孫にあたる朝比奈靖司氏のお宅に保存され、『有田医師会50年記念史・70年記念史・阿堤(あで)』に詳しく記載されている。

私立病院設立願

私立病院の位置—有田郡広村(「稲むらの火の館」の西隣)

病院名「なび病院」とする

(病院名は地元の地名からか?それ以上に深い意味があるのかも)

第1章

第1条病院設立の意義

—利益をえるために設立するのではなく、優秀な医師がいないため、私達が多少の

資金を出して優秀な医師を招き、広く人々の病気を治しその健康を保護する(この当時、公立病院の建設ラッシュであつたが、あえて自分たちで病院設立する。私立であるが「営利医療」ではないと明記されている)

第2条監督の件

(監督者の責務について詳しく書かれている)

第3条貧困の場合は診察、治療、施薬を無料にする

(低所得者について、無料診療)

第2章 職制

第1条往診の件

第2条院長の職務

第3条当直の件

第3章 院即

第1条診療部、薬局部、病室部の3部とする

第1診察局

第1条から第6条細かく内容を記載

第2薬局

第1条から第9条まで調剤薬平均の価格等記載

外来患者の心得

第1条から第4条まで診察の受け方等記載

第3病室

第1条から第7条病室での入院患者の過ごし方、費用等記載

入院患者の心得

第1条から第8条細かく入院患者の日常を記載

(それまでの日本の医療形態は「在宅医療」だったので、西洋医療の導入により、「病院医療」に転換したため、詳しく、入院・外来診療の件、往診制度、で患者の処遇。医師などの賃金を始めとした職員の処遇について、薬剤費などを明記して、経営実態も分かるようにした。)

以上から当時の設立の気運や、病院の経営の様子を詳細に知る事が出来る。この私立病院建設を成功するために、院長に京都で西洋医学を学んだ和歌山出身の吉村英微を招いて設立される。具体的な患者の診療記録はないが、これが和歌山県最初の私立病院で有田郡・広川町における西洋医学の出発となる。その後、規模拡大を理由に湯浅に移転することになるが、規模拡大の理由だけで移転したのか、気になるところである。

また、西洋医学の受け皿になる為に、全国的には公立病院が建設ラッシュの時期に、県に対して、有田郡に公立病院の設置を求めるに出なく、自ら買って出て「私立病院」の建設に踏み切ったことの真の意味を、あの世から発信してほしいと節に思った。

高齢社会になり、広川町も高齢化率38%程度となり、ますます、在宅医療が必要になってくる中、医療全体は高度医療課に進み、病院医療が中心となっている。広川町の明治・大正・昭和・平成をたどった「広川町の医療の歴史」、特に、高齢者に対する医療。津波を初めいくつかに天災に医療。コロナウイルス感染など感染症対策についての、「明治以降の医療」についての分析を進める中で、本来の地域医療が見えてくるのではないかと思ったが、今後の展開となった。

参考文献

『有田郡誌』
『広川町誌』
『湯浅町誌』
『有田医師会50年記念史・阿堤(あで)』
『有田医師会70年記念史・阿堤(あで)』
『和歌山赤十字病院八十年史』
『和歌山県立医科大学創立50周年記念写真集』
『和歌山県医師会設立50周年記念史』
『自治体病院の歴史』伊関友伸・三輪書店
『日本医療史』野村拓・吉川弘文館
『現代日本医療史』川上武・勁草書房